

文學界

復刻版

文藝春秋社・戦前版
全42巻・別冊1

不二出版

戦前期を代表する文芸雑誌、待望の復刻

芸術派・転向作家・既成リアリズム作家が

〈文学〉の名の下に結集し

閉塞する時代の只中で紡ぎ出した思考||表現群の全軌跡

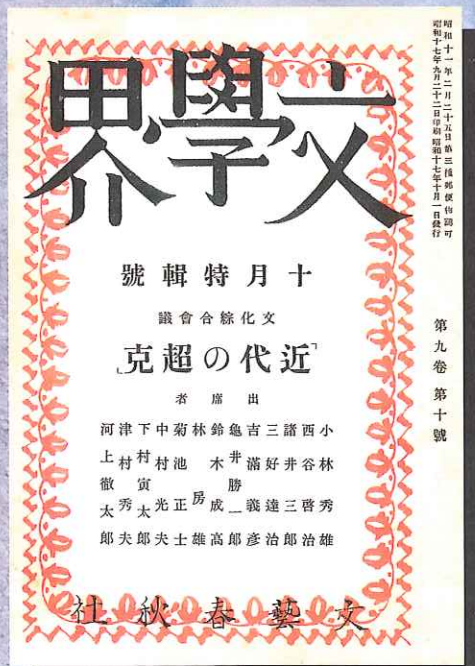
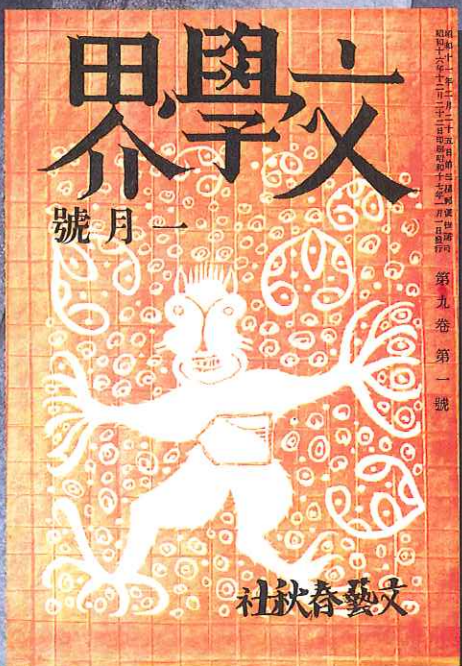
発行所 文藝春秋社▼一九三六年七月〜一九四四年四月

解説 檜原 修・田中勳儀

推薦 池内輝雄・栗原 敦・紅野敏郎・長谷川啓

配本 全7回配本▼二〇〇八年九月〜二〇一一年一月

定価 本体揃価格六三〇、〇〇〇円十税



一九三三（昭和八）年一〇月、（文芸復興）のさかんな機運のもと、『文學界』は文化公論社より創刊される。同人は川端康成、深田久弥、小林秀雄、武田麟太郎、林房雄、広津和郎、宇野浩二。芸術派、転向文学者、既成リアリズム作家の三派が集い、台頭するフアシズムと、それによる文化破壊から、文学、そして芸術を守ろうとする姿勢を示したのである。

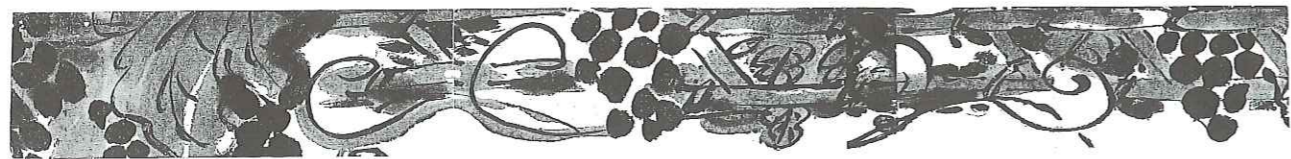
当初はたびかさなる休刊により解散寸前まで追い込まれる。しかし、小林秀雄の尽力により持ち直し、三六年七月（第三卷第七号）には文藝春秋社の発行に切りかえられた。それと時期を同じくして編集担当が河上徹太郎に移行され、同人の再編成も進められることとなる。広津、宇野らが退いたあとに、村山知義、島木健作、阿部知二、岸田国士ら加わり、また一九三八年には井伏鱒二、堀辰雄、亀井勝一郎らが、四〇年には火野葦平らが同人となり、（第二期）『文學界』を支えていく。誌面には「現代小説の諸問題」「現代青年論」「文学と政治」などを取りあげた同人座談会、「ブツクレヴュー」（のち「新著評論」）、「文化月報」がおどり、近代文学意識に基づく、個人主義と芸術主義を積極的に主張する立場を明確にしていたのである。

三七年から翌三八年にかけて、創作欄にも石川淳「マルスの歌」、井伏鱒二「早春日記」、島木健作「続・生活の探求」、北条民雄遺稿「吹雪の産声」、火野葦平「河豚」、中村地平「南方郵便」、伊藤整「幽鬼の街」といった秀作、問題作が次々に発表されるようになる。

しかしその一方で、盧溝橋事件にはじまる日中戦争の勃発、言論統制、そして発売禁止。時局の変化に伴い、その誌面はしだいに日本主義への傾向を強め、四二年には特集「近代の超克——知的協力会議」が編まれ、やがて四四年四月、政局により終刊にいたる。彼らをここに向かわせたのは一体何であったのか。激動する時代のなかで模索し続けた（文学とは何か）という問題を、きな臭さが漂う現在に、あらためて問い直してみたい。

本誌の創刊号から第三卷第六号までは一九七五年に財団法人日本近代文学館より復刻刊行されている（発売〃八木書店）。

弊社では、これまで未復刻であった第三卷七号から戦前の終刊号までを株式会社文藝春秋の全面的協力を得て刊行する次第である。 不二出版



文學界 第五卷 新年號 目次

海外文化ニユネス

大 河原 峠……………深田久彌(八)

續重病室日記……………北條民雄(八)

選都と英支提携……………江 尻 進(八)

米國の外交政策と之の經濟的背景中 村 武 嘉(八)

デモクラシーは死滅するか……………青野 季 吉(八)

小説に ついて……………舟橋 聖一(八)

日本語の不自由……………小 林 秀 雄(八)

古典の現代語譯……………柴 生 田 稔(八)

最近の音楽……………山 根 銀 二(八)

商業演劇に於ける雇傭制度……………青 柳 光(八)

統計と回答……………水 木 京 太(八)

「どん底」と限りなき前進……………中上川 良三(八)

雑……………感 興 堂 東 郷 青 兒(八)

アンドレ・モオロア……………ジャン・ランゾー(八)

心理學と神話の出現……………トオマス・マン(八)

藝術と國……………性 愛 堂……………T.S.エリオット(八)

アメリカ聯邦劇場の報告……………マーキョー(八)

報 月 化 文

歸らぬ憲兵……………林 房 雄(八)

早 春 日 記……………井 伏 鱒 二(八)

女占師の前に……………坂 口 安 吾(八)

マルスの歌……………石 川 淳(八)

狐……………岡 本 か の 子(八)

毒……………間 宮 茂 輔(八)

論 評

岩野泡鳴傳……………舟橋聖一(八)

フロオベル……………中村光夫(八)

非常事件は作用する……………佐藤信衛(八)

深淵への降り口……………中島健藏(八)

座談會

支那を語る……………

ユグレクツァ……………

幼女三……………

文學界後記……………

『文學界』第5卷1月号(1938年発行)の目次(原本の目次を52%縮小)

一九三三	10	武田麟太郎、林房雄、小林秀雄、川端康成、深田久弥、広津和郎、宇野浩二を編集同人として、文化公論社から発刊。▼林房雄「青年」(一九三四年二月)
一九三四	12	▼里見淳、横光利一、藤沢恒夫が同人に加わる。
一九三五	6	▼文園堂書店より復刊。
一九三六	1	▼中野重治「控へ帳」(一九三五年二月)
一九三七	7	▼中村光夫「文芸時評」(一九三五年一月)
一九三八	4	▼林房雄「獄中記」
一九三九	1	▼立野信之「窓」
一九四〇	1	▼里見淳、宇野浩二、豊島与志雄、広津和郎が同人を退く。▼阿部知二「冬の宿」(一九三九年一月)
一九四一	1	▼村山知義、森山啓、島木健作、舟橋聖一、阿部知二、河上徹太郎が同人に加わる。
一九四二	1	▼北条民雄「いのちの初夜」
一九四三	1	▼林房雄「壯年(第二編)」(一九三九年二月)
一九四四	1	▼中村光夫「二葉亭四迷論」(一九三九年一月)
一九四五	1	▼橋本英吉「櫻の芽立」
一九四六	1	▼「夜明け前」(合評会)(座談会)
一九四七	1	▼純粋小説座談会「下界の眺め」を中心に岡本かの子「鶴は病みき」
一九四八	1	▼発行所を文藝春秋社に移す。河上徹太郎編集になる。▼現代小説の諸問題(座談会)
一九四九	1	▼舟橋聖一「岩野泡鳴伝」(一九三二年二月)
一九五〇	1	▼詩と現代精神に關して(座談会)
一九五一	1	▼岸田国士、芹沢光治良が同人に加わる。▼菊池、久米を囲む文学論(座談会)
一九五二	1	▼日本の文化的現状——日本について(座談会)
一九五三	1	▼現代青年論(座談会)
一九五四	1	▼文学は何を為し得たか——本年度文壇の総決算(座談会)
一九五五	1	▼現代芸術の分野——文学・美術・映画・舞踊(座談会)
一九五六	1	▼発売禁止。▼川上喜久子「光にかかり」
一九五七	1	▼佐藤信衛、三木清が同人に加わる。▼岡本かの子「母子叙情」
一九五八	1	▼文学と政治(座談会)
一九五九	1	▼青野季吉が同人に加わる。
一九六〇	1	▼中村光夫「ギユスタフ・フロオベル」(一九三八年六月)
一九六一	1	▼中原中也追悼。
一九六二	1	▼北条民雄追悼。▼島木健作「続・生活の探求」
一九六三	1	▼中山義秀「厚物映」
一九六四	1	▼火野葦平「河豚」
一九六五	1	▼中村地平「南方郵便」
一九六六	1	▼伊藤整「幽鬼の街」
一九六七	1	▼中村光夫、井伏鱒二、今日出海、中島健藏、真船豊、堀辰雄、三好達治、亀井勝一郎が同人に加わる。▼中里恒子「乗合馬車」
一九六八	1	▼舟橋聖一「木石」
一九六九	1	▼村山知義「春香伝」朝鮮映画株式会社のために
一九七〇	1	▼岡本かの子「第一歩」
一九七一	1	▼岡本かの子追悼。▼岡本かの子「生々流転」(一九三二年二月)
一九七二	1	▼井伏鱒二「多基古村の人々」
一九七三	1	▼真杉静枝「ひなどり」
一九七四	1	▼山田清三郎「若い看守と瘋癲囚人」
一九七五	1	▼井伏鱒二「多基古村駐在記」
一九七六	1	▼舟橋聖一「谷間の宿」
一九七七	1	▼中村地平「霧の蕃社」
一九七八	1	▼中山義秀、火野葦平、上田広が同人に加わる。▼上田広「青い鳥」
一九七九	1	▼織田作之助「放浪」
一九八〇	1	▼中山義秀「美しき園」(一九三一年一月)
一九八一	1	▼北村謙次郎「満州文学近事」
一九八二	1	▼田中英光「オリムポスの果実」
一九八三	1	▼三好達治「朝鮮にて(旅行記)」
一九八四	1	▼浅野晃「国民文学運動私見」
一九八五	1	▼太宰治「東京八景——苦難の或るひとに贈る」
一九八六	1	▼立野信之「流れ」(第三部の一)
一九八七	1	▼林房雄「転向に就いて」
一九八八	1	▼牛島春子「張風山」
一九八九	1	▼中村光夫「戦争まで」(一九三二年二月)
一九九〇	1	▼亀井勝一郎「自然と信仰」
一九九一	1	▼外村繁「四十歳の日記」
一九九二	1	▼石中象治「戦争と文学」
一九九三	1	▼保田与重郎「政治と文芸」
一九九四	1	▼中島敦「古譚」
一九九五	1	▼小林秀雄「戦争と平和」
一九九六	1	▼上林暁「冬の酒」
一九九七	1	▼中島敦「光と風と夢——五河荘日記抄」
一九九八	1	▼宇野浩二「妻の手紙」
一九九九	1	▼堀辰雄「花を持てる女 幼年時代拾遺」
二〇〇〇	1	▼特集・近代の超克
二〇〇一	1	▼坂口安吾「青春論」(一九三二年二月)
二〇〇二	1	▼日本人の神と信仰について(座談会)
二〇〇三	1	▼李光洙「三京印象記」
二〇〇四	1	▼北原武夫「ジャカルタ入城日誌」
二〇〇五	1	▼今日出海「比島従軍」(一九三九年九月)
二〇〇六	1	▼芳賀禮「歴史について」
二〇〇七	1	▼永井龍男「手袋のかたづけ」
二〇〇八	1	▼特集・現代精神の緊急課題 ▼青野季吉「心輪」(一九三二年二月)
二〇〇九	1	▼特集・日華文化提携への反省
二〇一〇	1	▼特集・軍人精神と文学 ▼横光利一「旅愁」(一九三四年二月)
二〇一一	1	▼丹羽文雄「私の国民文学」
二〇一二	1	▼劉寒吉「古戦場」
二〇一三	1	▼終刊。

『文學界』復刻を推薦します

表紙は右から、一九三七年六月号、一九三八年九月号、一九四二年九月号、一九三八年三月号

戦前・戦中文学の中軸

池内輝雄〈國學院大学教授〉

先ごろ、中村真一郎の旧制高校時代の日記を見る機会があった。そこには、川上喜久子の「光仄かなり」が絶賛されている。「光仄かなり」は、『文學界』昭和十二年（一九三七）二月号に掲載された中篇小説だが、退役軍人の不品行、社会主義への共感、女性の目覚めなどが描かれていたため、発売禁止となり、「層屋」

行きとなったという（三月号「後記」）。だが、同号は日本近代文学館にもあるから、読むことができた人もいたようだ。発売禁止の憂き目は、軍国批判をした石



川淳の「マルスの歌」（十三年一月号）にも及んでいる。『文學界』には、ほかに北条民雄の「いのちの初夜」、岡本かの子の「生々流転」、田中英光の「オリムポスの果実」など名作が多数載っている。（幻）の「光仄かなり」を含め、それらを当時のかたちのままで読むことができるのは、読書人にとって大きな福音である。

文学作品だけではない。日中戦争の始まる直前の昭和十二年四月号からは、政治・経済から軽演劇・映画にいたるまで、

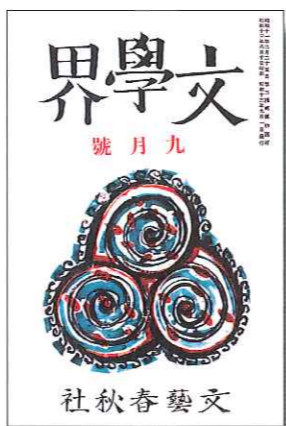
戦前期昭和文学研究の基本資料

栗原 敦〈実践女子大学教授〉

私たちは、どんなに公平に見ようと思っても、決して十分にそうすることができないし、第一、つね日頃世の中のほんの一局面しか見ていない。だから、謙虚に過去の現実を探ろうとするなら、時代の重要な一角を占めていた雑誌はいつも貴重な探照灯だと思ふ。先に復刻されていた『文學界』三巻六号以降を補う今

回の復刻で、文壇堂版時代との異なりが比較でき、同人の拡大・発展と戦中の時代の推移との関わりや屈折が雑誌や後記からも見て取れる。何より、この時期を代表する小説、評論の発表舞台、その背景としての諸動向がたちどころに感じられることになる。

私自身のささやかな関心からいっても、詩にも絶えず目配りがされていて、当初は萩原朔太郎が「詩壇時評」を継続、依然として中原中也の多くの作品の発表機関だったし（四巻十二号で「中原中也氏追悼」）、大江満雄、菊岡久利、小野十三



郎、高橋新吉、三好達治、神保光太郎他多くの作品が掲載されていて見過ごせない。後期だが、昭和十七、八年になって永瀬清子や草野心平が寄せた作品の評価も、もちろん単純な戦争鼓吹詩ではない



かもしれないが、様々な批判的吟味を必要とするものに他ならないのである。戦前版を揃って見渡すことができるようになる今回の復刻版、これに学ぶところは限りないと思う。

根幹雑誌の雄

紅野敏郎〈早稲田大学名誉教授〉

私はリトルマガジンのこよなき愛好者の一人だが、時代の象徴的存在となった根幹雑誌こそさらに重要、その両者をお互に見る複眼的な持主が近代文学の研究者とだと思っている。それによって現場にたちあう営みに豊かさが増し、歴史的認識が深まってくる。昭和十年代の『文學界』は、『新潮』『文藝』とともに文芸雑誌の根幹を形成、総合雑誌の『中央公論』『改造』と同時並行のかたちで読み

すすめていけば、その収穫はきわめて甚大なること明白。研究室、大学図書館、公立の中軸図書館においては、根幹雑誌の収集こそ優先順位第一と認識すべきである。枝や葉はそれに応じておのずと生い繁ってくる。

河上徹太郎の『文學界』の「編集後記」を終刊まで通読すれば、どのような刺激が与えられることか。韓国生活三十年の浅川伯教のもとに入りびたり、陶器を眺めている小林秀雄のことも書き込まれているし、銃後の文化講演会のことも出てくる。映画、演劇をも含めた幅広い新刊の同時代考察や亀井勝一郎と河上との対

談による戦時下の新著評論も興味深い。青野季吉の「経堂棟記」より転向後の心境、そこからの脱出の実態がうかがえる。

折口信夫・青野・堀辰雄・舟橋聖一の座談会「国文学と現代文学」は思わず繰ってみたくなる。著名な「近代の超克」関係のみならず、この種の座談会が満載されているのが『文學界』の魅力。小林秀雄の「無常ということ」「実朝」などの評論とほぼ同じ誌上で式場隆三郎の「白樺の人々」や中村光夫の執拗な二葉亭追跡の論などを読む楽しみは格別。岡本かの子はもとよりのことだが、中里恒子や「光仄かなり」「滅亡の門」の川上喜久子

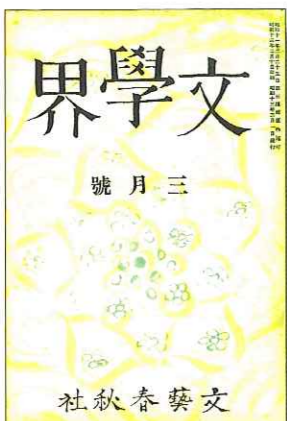
らの活躍の広場も『文學界』であり、田中英光も青春文学の傑作「オリムポスの果実」を寄せている。とくに川上の再評価こそ必要。「捷報いたる」の三好達治なら「戦果を歌うこと許すよ」という微妙な発言から現在の私たちはなにを読みとるべきか。ストレートに裁断してはならぬものもそこには含まれている。海外文芸の吉田健一、ラブレに没頭していた渡辺一夫にも注目。

『文學界』は、昭和文学、昭和史の坩堝であり、いまだ秘境と断言したくなるではないか。いざ探索の旅へ。

昭和十年代の女性文学を語る！

長谷川 啓〈城西短期大学教授〉

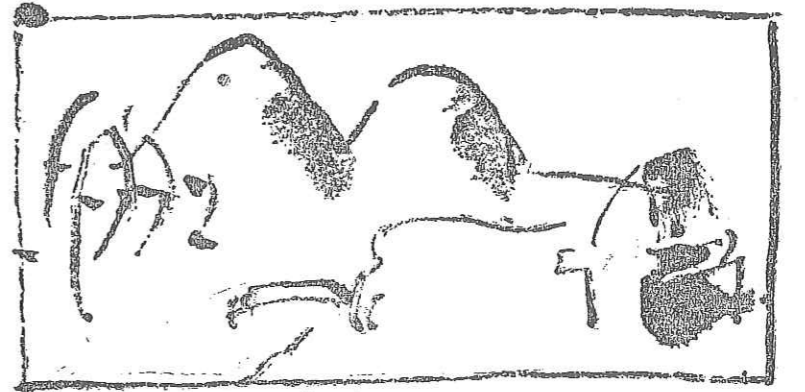
雑誌は、まさに時代を語るメディアである。昭和十年代の『文學界』にしても、しかりで、時代と文学の関係を伝えてくれる貴重な文献である。プロレタリア文学運動退潮後の「個人主義」と「芸術主義」を掲げる立場を鮮明にしながらも、やがて戦争の轍に巻き込まれ、「日本主義」に傾斜していくありようが、この時期の



文学の豊饒さとともに知らせてくれる。『文學界』をざっと通覧するだけでも、なんと男性文学者の世界かと、今さらながらこの時代の実態を思い知らされるが、それでも、毎号掲載とはいえないま

でも、今回復刻された三巻七号から十一巻四号まで全九十四冊中、女性の執筆者は二十四人ほど登場してくる。小説が圧倒的に多く、詩・エッセイ・紀行文など、充実した女性文学の開花をみせている。本誌掲載の「乗合馬車」で女性初の芥川賞を受賞した中里恒子、「滅亡の門」で第一回文学界賞を受賞した川上喜久子は、ほとんどこの『文學界』で育ったといえるだろう。岡本かの子は、「母子叙情」「生々流転」など生前から死後にわたって掲載され、追悼文まで載せられている。佐藤（田村）俊子・宇野千代・林芙

美子・円地文子・矢田津世子の小説、そして、山川菊菜・中本たか子・松田解子・岡田禎子・真杉静枝・牛島春子等々の作品もある。昭和十年代の『文學界』の現象は、女性文学にも顕れていて、階級闘争に関わる女性や朝鮮の女性の成長などを描く十年代初頭から、戦争の激化とともに日本賛美に至る状況を映し出している。戦争末期になると、ますます男性の文学世界となり、女性の執筆は少なくなっている。ともあれ、女性文学の豊饒さと移り変わりを知らうえでも、必読の復刻版である。



マルスの歌

石川 淳

歌が聞へて来ると……だが、この感情をどう現はしたらばよいのか。今、黄昏の室内でひとり椅子に掛けてゐるわたしの耳許に、狂躁の巻から窓硝子を打つて殺到して来る流行歌『マルス』のことを云つてゐるのだ。

神ねむりたる天が下
智慧ごとく黙したり
いざ起て、マルス、勇ましく

石川淳「マルスの歌」
1938年1月号の本文(原本90%縮小)。
同号は「反戦反軍的内容を包含する故」
発禁となった(『出版警察報』[復刻版、
不二出版]より)。

李陵

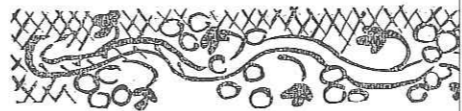
中島 敦

中島敦「李陵」1943年7月号
の本文(原本90%縮小)。

支那文章論	吉川幸次郎
日本語の安定	中島健蔵
ヴァレリのスタンダール論	桑原武夫
古典性の探求	重友 毅
口倫理の徴	高木 卓
名と弾丸	火野葦平
「ボルネオ紀行」から	中村地平
魏ル・スンガイ	中山義秀
妻の手	村口正夫
心輪	青野季吉

1944年4月号(終刊)の目次
(原本40%縮小)。

同人	佐藤信衛	深田久弥	主要執筆者	中里恒子
青野季吉	里見 弾	藤沢恒夫	浅野 晃	中島 敦
阿部知二	島木健作	舟橋聖一	石川 淳	中原中也
井伏鱒二	芹沢光治良	堀 辰雄	伊藤 整	芳賀 檀
上田 広	武田麟太郎	真船 豊	牛島春子	萩原朔太郎
宇野浩二	豊島与志雄	三木 清	岡本かの子	橋本英吉
亀井勝一郎	中島健蔵	三好達治	大岡昇平	北条民雄
河上徹太郎	中村光夫	村山知義	北原武夫	松田解子
川端康成	中山義秀	森山 啓	坂口安吾	保田与重郎
岸田国士	林 房雄	横光利一	太宰 治	山田清三郎
小林秀雄	火野葦平		立野信之	
今日出海	広津和郎		東郷青児	



漢の武帝の天漢二年秋九月、騎都尉・李陵は歩卒五千を率る、邊塞遮虜郡を發して北へ向つた。阿爾泰山脈の東南端が戈壁沙漠に殺せんとする邊の礪確たる丘陵地帯を縫つて歩行すること三十日。朔風は戎衣を吹いて寒く、如何にも萬里孤軍來るの感が深い。漠北・浚稽山の麓に至つて軍は漸く止營した。既に敵匈奴の勢力圏に深く進み入つてゐるのである。秋とはいつても北地のこととて、首霜も枯れ、榆や檉柳の葉も最早落ちつくしてゐる。木の葉どころか、木そのものさへ(宿營地の近傍を除いては)容易に見つかからない程の、唯砂と岩と礫と、水の無い河床との荒涼たる風景であつた。極目人煙を見ず、稀に訪れるものとは曠野に水を求める羚羊ぐらゐるものである。突兀と秋空を劃る遠山の上を高く雁の列が南へ急ぐのを見ても、しかし、將卒一同誰一人として甘い懐郷の情などに咬られるものはない。それ程に、彼等の位置は危険極まるものだったのである。

騎兵を主力とする匈奴に向つて、一隊の騎馬兵をも連れずに歩兵ばかり(馬に跨る者は、陵とその幕僚數人に過ぎなかつた)で奥地深く侵入することからして無謀の極といふ外は無い。その歩兵も僅か五千、絶えて後

人民文庫

武田麟太郎主宰
一九三六(昭和一一)年〜一九三八(昭和一三)年
全二六冊・別冊一
二・二六事件のまさに一〇日前に創刊された本誌は、内務省の後押しで文芸統制のために結成された文芸懇話会や一部にファッショ的傾向のある「日本浪漫派」などの文学の体制内化を厳しく糾弾し、被抑圧階級庶民に文学の起点を求めた。反ファシズム・人民文学思考の文学雑誌として、苦悩する若い左翼文学者たちの戦前最後の砦となつた本誌が、文学史上・近代史上に占める位置は重要である。
体裁|| 菊判・B6判・並製・総五〇三四頁
解説|| 小田切秀雄
推薦|| 池田浩士・小田 実・長谷川啓・水上 勉
定価|| 本体価格一八〇、〇〇〇円十税



文学報国

日本文学報国会刊
一九四三(昭和一八)年〜一九四五(昭和二〇)年
本紙は、太平洋戦争下の昭和一七年五月に、国策の周知徹底と宣伝普及のため情報局の指導により発足した日本文学報国会の機関紙である。その後期に同じ役割を果たした日本文芸中央会の機関紙「日本文芸新聞」(弊社にて復刻刊行済み)の後継紙でもある。言論の自由を完全に奪い去つた後の文化統制下の知識人・文化人の状況を明らかにし、帝国主義戦争と文学とアジアの問題を考える重要な材料として復刻するものである。
体裁|| A3判・上製・函入・総一六〇頁
解説|| 山内祥史/解説|| 高橋新太郎
推薦|| 尾崎秀樹・小田切進・久保田正文
定価|| 本体価格一八〇、〇〇〇円十税

文学案内

貴司山治主宰
一九三五(昭和一〇)年〜一九三七(昭和一二)年
全一〇巻・別冊一・付録一
本誌は、大衆小説家であり、プロレタリア文化運動の中心人物の一人として知られる貴司山治が主宰し、昭和一〇年一〇月に創刊された。文学好きの勤労大衆に創作の見本を示し、「生活・勤労の場面を描いた小説」を募集・掲載し、労働者の中から作家を養成することを目的とし、アジアの文学作品の紹介、全世界の労働者文学の現状を報告するなど、労働運動史・旧植民地文学史の研究者にとって貴重な資料である。
付録|| 「小さい花束」/ハイン・バルザック肖像写真/「文学新聞」(二号・八号)
体裁|| 菊判・上製・総三四五二頁
解説|| 浦西和彦
推薦|| 伊藤共治・浦田義和・黒古一夫・紅野敏郎
定価|| 本体価格一四〇、〇〇〇円十税



文芸懇話会

一九三六(昭和一一)年〜一九三七(昭和一二)年
全二巻・別冊一
本誌は、文壇・文学者のファシズム統合への道を拓いた官民合同の文学団体「文芸懇話会」の機関誌である。同会は一九三四年三月、内務省警保局長松本学が文化統制を目的に直木三十五らファッショ作家を抱え込んで創立、大衆文学・自由主義までの多くの作家を取り込むことに成功した。編集は交代制で、川端康成・菊池寛・室生犀星・吉川英治・徳田秋声・島崎藤村・佐藤春夫ら。国家の文化政策とそれに対峙する文学者とのせめぎ合いを明らかにする。
体裁|| A5判・上製・総一五一六頁
解説|| 高橋新太郎
推薦|| 海野福寿・榎本隆司
定価|| 本体価格五三、〇〇〇円十税

内容案内送呈
お申し付けください

復刻版概要

原本	発行所=文藝春秋社 発行=第3巻第7号(1936年7月)~ 第11巻第4号(1944年4月)全94号
体裁	A5判・上製・総21,000頁
別冊	解説・総目次・執筆者索引 (別冊のみ分売可=2,000円+税) ISBN978-4-8350-6162-7
解説	檜原 修(広島大学総合科学部教授) 田中勳儀(同志社大学文学部教授)
推薦	池内輝雄(國學院大學教授) 栗原 敦(実践女子大学教授) 紅野敏郎(早稲田大学名誉教授) 長谷川啓(城西短期大学教授)
定価	本体揃価格630,000円+税
記本	全7回配本2008年9月~2011年1月

* 原誌巻号第1巻第1号~第3巻第6号までは
日本近代文学館にて復刻刊行済みである。

第2回配本					第1回配本					巻 復 刻 版 数	原 誌 巻 号 *	原 誌 発 行 年 月	本 体 価 格 配 本 年 月														
別冊	第12巻	第11巻	第10巻	第9巻	第8巻	第7巻	第6巻	第5巻	第4巻					第3巻	第2巻	第1巻	第12巻	第11巻	第10巻	第9巻	第8巻	第7巻	第6巻	第5巻	第4巻	第3巻	第2巻
(解説・総目次・執筆者索引)	第5巻第5号~第6号	第5巻第3号~第4号	第5巻第1号~第2号	第4巻第11号~第12号	第4巻第9号~第10号	第4巻第7号~第8号	第4巻第5号~第6号	第4巻第3号~第4号	第4巻第1号~第2号	第3巻第11号~第12号	第3巻第9号~第10号	第3巻第7号~第8号	第3巻第5号~第6号	第3巻第3号~第4号	第3巻第1号~第2号	第3巻第9号~第10号	第3巻第7号~第8号	第3巻第5号~第6号	第3巻第3号~第4号	第3巻第1号~第2号	第2巻第11号~第12号	第2巻第9号~第10号	第2巻第7号~第8号	第2巻第5号~第6号	第2巻第3号~第4号	第2巻第1号~第2号	
	二〇〇八年度合計 本体九〇,〇〇〇円																										
	2009年4月 90,000円+税 8350-6120-7					2008年9月 90,000円+税 8350-6113-9																					

第7回配本					第6回配本					第5回配本					第4回配本					第3回配本									
第42巻	第41巻	第40巻	第39巻	第38巻	第37巻	第36巻	第35巻	第34巻	第33巻	第32巻	第31巻	第30巻	第29巻	第28巻	第27巻	第26巻	第25巻	第24巻	第23巻	第22巻	第21巻	第20巻	第19巻	第18巻	第17巻	第16巻	第15巻	第14巻	第13巻
第11巻第1号~第4号	第10巻第10号~第12号	第10巻第7号~第9号	第10巻第4号~第6号	第10巻第1号~第3号	第9巻第10号~第12号	第9巻第7号~第9号	第9巻第4号~第6号	第9巻第1号~第3号	第8巻第11号~第12号	第8巻第9号~第10号	第8巻第7号~第8号	第8巻第5号~第6号	第8巻第3号~第4号	第8巻第1号~第2号	第7巻第11号~第12号	第7巻第9号~第10号	第7巻第7号~第8号	第7巻第5号~第6号	第7巻第3号~第4号	第7巻第1号~第2号	第6巻第11号~第12号	第6巻第9号~第10号	第6巻第7号~第8号	第6巻第5号~第6号	第6巻第3号~第4号	第5巻第11号~第12号	第5巻第9号~第10号	第5巻第7号~第8号	第5巻第5号~第6号
一九四四年一月~四月	一九四三年一月~二月	一九四三年七月~九月	一九四三年四月~六月	一九四三年一月~三月	一九四二年七月~九月	一九四二年四月~六月	一九四二年一月~三月	一九四一年一月~二月	一九四一年一月~二月	一九四一年三月~四月	一九四一年一月~二月	一九四一年五月~六月	一九四一年三月~四月	一九四一年一月~二月	一九四〇年一月~二月	一九四〇年九月~十一月	一九四〇年七月~八月	一九四〇年五月~六月	一九四〇年三月~四月	一九四〇年一月~二月	一九三九年一月~二月	一九三九年九月~十一月	一九三九年七月~八月	一九三九年五月~六月	一九三九年三月~四月	一九三八年一月~二月	一九三八年九月~十一月	一九三八年七月~八月	一九三八年五月~六月
二〇一〇年度合計 本体二七〇,〇〇〇円					二〇一〇年度合計 本体二七〇,〇〇〇円					二〇〇九年度合計 本体二七〇,〇〇〇円					二〇〇九年度合計 本体二七〇,〇〇〇円					二〇〇八年度合計 本体九〇,〇〇〇円									
2011年1月 90,000円+税 8350-6155-9					2010年9月 90,000円+税 8350-6148-1					2010年4月 90,000円+税 8350-6141-2					2010年1月 90,000円+税 8350-6134-4					2009年9月 90,000円+税 8350-6127-6									

価格の下の数字はISBNを示す。数字の前に978-4-が付きます

不二出版
 ▶ 〒113-0023
 ▶ 東京都文京区向丘 1-2-12
 ▶ TEL 03-3812-4433
 ▶ FAX 03-3812-4464
 ▶ 振替 00160-2-94084

* 表示価格はすべて税別